

特集「作る技術・作らない技術」の発行に寄せて

馬場 定行

近年、ビジネス環境の変化がますます激しくなっている。新型コロナウイルス感染症で影響を受けた経済も回復に向かい、人や物など必要なリソースが不足する中、増加する需要への対応を多くの企業が迫られている。また、地政学的なリスクも増大しており、地球上のさまざまなところで頻発する諸問題は瞬く間に世界規模で影響を及ぼしている。このような想定を超えた激しい変化は、企業が事前に備えうる範囲を超え、事業環境の変化を素早く察知して俊敏に対応できる企業とできない企業の差を大きく広げている。激しい経営環境の変化の中で増加する需要に対応するため、企業の価値の在り方も変化してきている。これまでのコスト改善による価格低減だけではなく、ますます変化し多様化する顧客に合わせ、自社のサービスや商品の価値の向上や提供する価値の在り方そのものを見直す動きが活発になっている。

また、気候変動や地政学的なリスクが近年高まっており、ビジネスのレジリエンスにおいても俊敏な対応がますます求められている。企業は俊敏性に加えて、顧客の変化や地政学的リスクに柔軟に対応する力を求められている。これらの変化はビジネスやオペレーションを支える企業のITシステムにも俊敏性と柔軟性を求めている。そのため多くの企業ではビジネス機能とそこで必要とされるITシステムごとに、適切なシステムのあり方とその実現方法について検討が進んでおり、「作る技術、作らない技術」の目利きはその重要性が増している。

対象ビジネスが非競争領域である場合や、競争領域でもある程度範囲が限られる場合は、作らない、もしくは作る量を減らすという選択が採られる。企業や業界をまたがって標準化されている人事や経理などの業務に対しては、導入コストを抑えつつ関連法令や業界動向に対応する業務特化型SaaSの導入が進んでいる。ある程度範囲が限定された業務オペレーションであれば、ローコード/ノーコード、RPAなどを活用しながらエンドユーザー部門がITシステムの構築に主体的に参画し、俊敏に対応する動きも始まっている。

一方で、競争領域においては他社との差別化が必要なことから俊敏性と柔軟性を高めながら独自の機能開発が行われるため、ITシステムの稼働環境やアプリケーションの開発方法が変化し、従来からある基幹系システムにも変化を及ぼしている。さらに、それらの変化によってシステムの複雑度が増加した結果、開発・運用全体を管理する機能にも変化を及ぼしている。ITシステムの稼働環境では、ハードウェア制約から解放されソフトウェアとして環境構築がなされるIaaS、PaaSなどのクラウドの利用が必須となってきている。また、アプリケーションの稼働環境全体を仮想化してその構築や移動、運用管理の手間とコストを軽減するコンテナ技術を用いたオーケストレーションツールの活用は、アプリケーションの独立性を高め、アプリケーションの運用に柔軟性をもたらしている。

アプリケーション開発ではデザイン思考やアジャイル開発を取り入れ、短期間に必要な機能を必要な都度開発し、運用・改善を繰り返すCI/CDが行われており、開発する際には俊敏性・

柔軟性を高めるため複数のクラウドサービス事業者が機能ごとにサーバーレスで提供する FaaS の利用が進み、その結果マルチクラウド環境での開発が拡大している。これらの作る技術の変化は、従来からある基幹系システムにも変化を起している。オンプレミスから、クラウドにリフトされた基幹系システムにおいても、これまで持っていたセキュリティや耐障害性などの堅牢性は維持しつつ、柔軟な稼働環境を手に入れ、これまでのビジネスオペレーションを最適化しつつ提供価値を向上するためにデータ分析や AI などの高度なサービスが提供する機能の活用を始めている。これらの強化されたビジネス機能は FaaS として、CI/CD の中で利用され、顧客提供価値の向上に寄与する。

IT 稼働環境、アプリケーション開発、基幹系システムの変化は、マルチクラウド環境下でのクラウドネイティブ開発をさらに促進し、その結果 IT システム全体の複雑度はさらに増加している。複雑なシステムやアプリケーション全体の状態を常に把握し、問題を特定するためのオペラビリティは、IT システムの効率性や信頼性を維持するために欠かせないものとなっている。また、機密性の高いデータも取り扱われるため、セキュリティ確保の重要性が高まってくる。短サイクルでありながらもこれらの要求を着実に満たすため DevSecOps を支える基盤は今や欠かせないものとなっている。またアプリケーション開発の設計実装にあたり何ものにも信頼を与えないという前提に立ち、明示的な検証、最小限の特権アクセス、社内外のいかなる場合も侵害を想定するゼロトラスト原則はアプリケーションの開発から運用までのプロセスの中にセキュリティを常に組み込み、安全安心なアプリケーションの構築に大きく寄与する。

このようにビジネス環境の変化に合わせて進化する IT システムと、その開発、稼働環境は、ますます複雑さを増している。活用する技術やサービスも多岐に及ぶ。BIPROGY では、クラウド環境においてビジネスオペレーションを支える大規模な基幹系システムの実装を手掛け、かつ、既存システムのクラウド移行も多く手掛けている。また、モバイルなどのデバイスの多様化とそのアプリケーションにも対応し、顧客接点の多様化にもお客様と共に取り組んでいる。そこで蓄積された情報をもとにお客様のその先のお客様や業界の課題、地域社会の課題の解決にも取り組んでいる。これらの取り組みを通して得られた知識と経験は、サービス体系にまとめて提供しており、更に多くのお客様や業界、地域社会の課題解決に貢献できるものと考えている。

本特集号では、「作る技術・作らない技術」として、激しさが増すビジネス変化を支える IT システムのあり方、そこで必要な技術の目利きと、その事例を BIPROGY グループの取り組みを通じてまとめている。多くの企業や団体が、この不確実なビジネスや社会の環境の変化を恐れることなくチャンスととらえて、より良い価値を提供し、顧客、業界、社会の課題解決に取り組んでいく中で、本特集号が参考になれば幸いである。

(業務執行役員)